

第7回（2014年）「昭和女子大学女性文化研究奨励賞（坂東眞理子基金）」選考報告
昭和女子大学女性文化研究奨励賞選考委員会

選考委員会より、本書の概要と賞贈呈の理由について報告いたします。

「昭和女子大学女性文化研究奨励賞」は、卒業生を含む若手の昭和女子大学関係者に対し贈呈するものである。

第7回研究奨励賞は、2014年中に刊行された著作が対象となっており、単行本2点と紀要論文1点が選考対象となった。第1回目の研究奨励賞選考委員会は2015年2月4日に開催され、選考の対象を単行本2点に絞られた。また第2回目の選考委員会を2015年3月4日に開催し、中山節子氏の『時間貧困からの脱却にむけたタイムユースリテラシー教育—ESCAP 地域の人間開発新戦略』（大空社より2014年2月22日に出版）が最終候補となり、2015年4月10日の最終選考委員会において、本書に「研究奨励賞」を贈呈することが決定した。

なお、次点となった著作は『モダニスト ミナ・ロイの月世界案内 詩と芸術』であり、本学関係者が二つの章を担当執筆されているものであった。こちらは英国の女性詩人・芸術家「ミナ・ロイ」の作品の翻訳、伝記、エッセイ、写真図録などを、複数の著者が執筆することで構成されており、モダニストとしてのミナ・ロイの作品や生き方を探る上で貴重な資料・視座を提供していることは否めないが、単独の著作ではないこと、および中山氏の著作が本女性文化研究奨励賞の趣旨である「男女共同参画社会形成の推進」という点に、よりグローバルな観点から具体的に貢献するものである内容であることから、中山氏の著作に研究奨励賞を贈呈することに決定した。

中山節子氏は東京学芸大学教育学部、同大学院教育学研究科にて大竹美登利教授に指示、またオレゴン州立大学にて女性学を専攻し修士号を取得し、帰国後、昭和女子大学大学院生活機構研究科博士課程にて博士（学術）の学位を取得された。

現在は千葉大学教育学部准教授でいらっしゃる傍ら、東京学芸大学連合大学院博士課程での指導に携わっておられる。

さて、本書は2005年3月に本学大学院生活機構研究科で学位を授与された博士論文を基に執筆されている。構成は「はじめに」に続く序章、第I部「ESCAP 地域の生活時間調査」（第1章から第3章）、第II部「人間開発・自立教育のためのタイムユースリテラシー」（第4章、第5章）、終章から成り、全225頁である。

本書が選ばれた理由の第1点目は、単独の著作であること、第2点目は本賞の趣旨により合致した内容であり、グローバルな視点を交えてジェンダー平等と男女共同参画社会

形成に資する研究内容であること、第 3 点目は理論と実践とを組み合わせることにより、より高い次元の研究成果を導き出していると判断されたことによる。

中山氏は ESCAP 地域における生活時間データの収集と分析という膨大な作業を通じ、「生活時間認識の相違」という問題があることを明らかにする。そしてこの生活時間認識を、国連機関においても教育学においても開発途上国に端を発して経験と理論を深めている「リテラシー」概念にリンクさせ、特に開発途上国の女性や女兒が陥っている「時間貧困」(Time poverty, Time-poor)を撲滅するためにも、女性たち自身が主体的に時間貧困の状態を意識化し、変革していくという「人間開発」の視点に裏付けられた「タイムユースリテラシー」を持つこと、そしてタイムユースリテラシー育成のための教育的支援のアプローチが必要であることを導き出す。このようなアプローチは一時的な対症療法ではなく、長期的視点から女性の人間開発を推し進め、真の男女平等の実現につながるものとして注目される。

さらに中山氏は、第 5 章において、日本の家庭科教育における男女平等教育・自立教育としての「生活時間」の授業実践を、自らが主導する共同研究によって行った結果をまとめている。

本書を女性文化研究奨励賞に決定するにあたり、選考委員会が最も評価した点は、中山氏が「生活時間」教育を単なる「規範」として捉えるのではなく、それぞれの発展段階に応じてジェンダー視点を導入し、児童・生徒自らに男女共同参画の可能性と必要性に気づかせた点にある。

男女一人ひとりを多面的自立へと方向づける教育実践については、これまで意識的な試みはなされておらず、ここに本研究の優れた独自性を見出すことができる。

最後に本研究ならびに中山氏に期待することとして、次の 2 点を挙げたい。

第 1 点目は、中山氏自身も研究課題として挙げている ESCAP 地域における生活時間研究の発展である。これについては、すでに大竹美登利氏との共同研究によりインドネシアの生活時間調査の報告書(英文)を出版されるなど、意欲的に取り組まれている。

第 2 点目は「時間貧困」について、階級階層の視点・ジェンダー視点に「生活の社会化」と家計の視点を加えてさらに深めていただけたらということである。ペイド・アンペイドの二重の労働の負担に苦しむ女性たちの状況はすでに多くの研究が明らかにしているが、特に生活の社会化(社会化されたモノやサービスの購入)によって家庭内労働を軽減できない層の生活困難の状況や、教育を受けるうえで子どもたちが被る不利益の問題など、時間認識の改善だけでは解決できない生活に困難をもつ家族・個人の生活問題なども視野に入れたご研究の発展を期待したい。